

第85回ジェンダーセッション

開催レポート

「小さなメディアとフェミニズム」

登壇者：野中モモ氏（ライター、翻訳家）

片上 平二郎

Key Words ZINE、メディア、フェミニズム

1. はじめに

第85回ジェンダーセッションは、ライター・翻訳家である野中モモ氏をお招きし、自主制作出版物ZINEとフェミニズムの関係についてお話していただいた。野中氏は、書籍執筆や翻訳活動を通じてZINE研究にとっての大きな役割を担ってきたとともに、ZINE販売サイト「Lilmag」やZINE制作者たちの交流の場を運営するなどのかたちで実践的に日本の自主制作活動に関わってきた人物でもある。“大きな”マスメディアの領域では目を向けられにくい多様な人々の声をすくい上げる“小さな”メディアの存在は、歴史的にジェンダー・マイノリティにとっても大きな意味を持つものであった。

いまなお予断を許さない新型コロナ禍の只中で、ジェンダーフォーラムのイベントもまた、オンライン形式を採用するなどさまざまなかたちで新たな試みを行っていく必要が生じている。それは“これまでできていたことができなくなる”というネガティブな側面を持つ部分もあるが、同時に“新たな試みを行うことによって、これまでできなかったことができるようになる”ということの意味でもある。このような新たな交流の形態を探る中で、既存のメディアと異なるさまざまな

実験的な試みを行ってきた“小さな”メディアの活動、そして、その“小さな”メディアを紹介する活動を行ってきた野中氏の活動は多くの示唆を与えてくれるものであるだろう。

これまでジェンダーフォーラムは、学術研究組織であると同時に社会に対して実践的に働きかける運動体としてあることを意識し、その二つの性格を重ね合わせることを目指して活動を行ってきた。そのような意味において、研究活動と実践活動を同時に行ってきた野中氏のお話はジェンダーフォーラムの活動を考えるためにも大きな意義を持つものであろう。以下では、ジェンダーセッション開催レポートというかたちで、当日の野中氏のお話をまとめていきたい。

2. 野中モモ氏のこれまでの活動

まず、第85回ジェンダーセッションは、ZINEにまつわる野中氏のこれまでの翻訳や執筆のお仕事の紹介から始まった。まずもっとも直接的に本セッションの内容に関係するお仕事は、アメリカの文学・女性学研究者アリスン・ピープマイヤーによる『ガール・ジン「フェミニズムする」少女

たちの参加型メディア』の翻訳であろう。原著の出版からさほど間を置かず翻訳が出版されたこの本は、学術的にZINEを取り扱った研究として、そして、女性がつくったZINEを対象としたものとして画期的な一冊であった。残念なことに、アリスン氏は亡くなってしまったが、この本自体は決して古びることがないZINE研究において重要な書籍であり続けることだろう。

続き、野中氏がZINEについて書いた書籍として、ばるほら氏との共著『日本のZINEについて知ってることすべて 同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史1960～2010年代』がある。2年にわたり「アイデア」というデザイン雑誌における連載をまとめたこの本は、さまざまなかたちで育まれてきた日本独自の自主制作、自費出版文化をZINEという視点に基づいて横断的に紹介していくものである。日本でもこれまで、商業的なシステムの中ではピックアップされにくい文化について、趣味や志を共有する人たちが自分たちの存在を表現するためにさまざまな自主出版活動を行ってきた。そのような活動のすべてを網羅することはできないが、その一角を示しつつ、読者にさらに広い文化的世界の存在を想像してもらうために、膨大な資料の具体的な紹介と、著者二人の対談やキーパーソンのインタビューによってこの本は構成されている。ZINEという枠組みの中でファッションや音楽、政治運動など多くのジャンルの制作物を紹介することによって、それらのさまざまな分野が実はつながりをもって社会の中に存在しているということを読者に感じてとってもらうことも意識されているとのことであった。

そして、2020年に刊行された単著『野中モモの「ZINE」小さなわたしのメディアを作る』がある。この本は、野中氏が個人的にこれまでどういったものに惹かれてきたのか、そして、これまでどんな活動をしてきたのかを語りながら、同時に、どんな活動をしている人たちがいるかを紹介するものである。具体的な活動を通じて野中氏が感じ取ってきたZINEの姿が描き出されている。

ZINEにさまざまなかたちで深く関わって来た野中氏の視点から、これ以降、ZINEの歴史とそれが持つ社会的意味が語られていく。

3. ZINEのはじまり

言葉は生き物であり、その時々でその言葉の定義はどんどん変わっていくものである。そのようなことをふまえて、野中氏はZINEを「個人または少人数の有志が非営利で発行する自主的な出版物」として捉えている。ZINEと重なる言葉は、英語でもPamphlet、Chapbook、Minicomic、Artist's book、Fanzineなどたくさんあるが、それら言葉の中でも、個人がコピー機や軽印刷を使って、多くても1000部に届かない程度、大抵は100部以下でつくられる自費出版物を指す言葉としてZINEはもっともポピュラーに使われている語であるという。日本においても、同様に、ミニコミ、同人誌、個人誌、ファンジン、リトルプレス、自主出版、自費出版、フリーペーパーなど、ZINEと意味合いが重なる言葉は多々存在している。

元々、ZINEという言葉は雑誌を意味するマガジンから派生した言葉であった。多くの雑誌が刊行され読者を生み出していく中で、自分でも雑誌のようなものをつくりたいと考えていた人々が現れはじめる。技術の進歩によって、彼らが自分で自主制作物をつくることのできる環境が整いはじめ、初めは会員制のファン活動の一環としていわゆるファンジンというかたちで、ZINE文化は発展してきた。特にその直接的なルーツは、当時は権威的な文学観の中では見下されてきたサイエンス・フィクション、つまりSFジャンルにおけるファンジン文化にあると言われており、そこから徐々に映画や音楽文化へと広がっていったとされる。

1970年代には、パンク・カルチャーの中でZINEが力を持つようになった。一般的にはパンクというもののイメージについては、過激なファッショ

ンや刺激的な音楽といった表面的なイメージのみが強く持たれているかもしれないが、実際にはそれにとどまらない反権威主義や反商業主義の精神がパンク・カルチャーの中には存在している。パンク・カルチャーとは、商業的な既製品から離れ、自分たちの手で何かをつくっていく活動、DIY (Do It Yourself) の倫理が培われる場でもあった。メジャーなレコード会社から距離をとり、作品の制作だけでなく流通手段を含め自分たちで新たなものをつくっていかうとするインディペンデント・レーベルの精神は、アナキズムやヒッピー文化などのカウンターカルチャーにも結びつくものであり、ZINE活動や海賊ラジオの放送などの試みもそこで行われるようになっていった。パンクの存在はZINE文化に大きな意味を持っている。

ZINEの歴史はしばしばこのようにまとめられるものであるが、このような「正史」が単純化されて語られてしまうと、そこにはZINEがあたかも「都会の若い異性愛者の白人男性サブカルチャー」であるかのように扱われてしまう危険性がある。SFもパンクも一般的には男性性が強い文化として捉えられている。よって現在、このような「正史」に対して、いくつかの異なる歴史的な文脈を見直そうとする立場が現れてきている。

その1つに、ZINE文化を、社会運動の文脈と重ねたり、前史として日記や文通をやってきた女性たちの流れを追っていったりする立場がある。「マジョリティのサブカルチャー」的な「正史」に対して、女性やマイノリティたちが培ってきた多様な視点をZINEの歴史に見出していく必要がある。そのようにしてSFやパンクといった文脈だけがZINEの歴史と結びつくわけではないと語る立場があると同時に、それらのサブカルチャーの中にも女性たちが活躍してきたことを強調しようとする立場も存在している。SFやパンクの歴史の中にも、多くの女性たちが活躍してきた歴史がある。当初は異端的なものとして扱われてきた文化の中でマイノリティが果たしてきた役割は大きなものだ。ある文化の中に排除や差別があった

ことを認めつつも、その中で文化の中で地道に活動を続けてきたマイノリティたちの姿を見出す研究が力を持ち始めている。

ZINEが日本で紹介される際には、当初はその“おしゃれさ”や“かわいさ”といった部分を取り出されて語られる傾向が強かった。だが、近年、その紹介が進む中でこのようなZINEの歴史的な文脈を踏まえて、ZINEというメディアが持つ“自由に作ること”の重要性が積極的に語られるようにもなりはじめています。

4. ZINEの展開

コピー技術、そしてワープロやパソコンの普及によって、ZINE文化は1980年代から90年代において活発化していく。インターネット普及以前の文化として、小切手や切手を送り、紙の制作物によって交流するネットワークがどんどんと社会の中に生み出されていった。そして1997年の『The Factsheet Five Zine Reader』のようなZINEをまとめて紹介する書籍が出版される時期を境目として、ZINEが大きな力を持つ1つの文化として意識されるようになった。

そうした書籍の中で紹介されるZINEを見ていくと、フェミニズム的関心が強いものが多いことに気付かされる。そしてそこでのフェミニズム的関心は、草の根フェミニズムとして力を持っていた「ライオットガール」という運動であったり、移民の視点を入れていく運動であったり、容貌差別を批判するボディ・ポジティブ運動であったりと、白人中産階級の女性たちによる主流とされてきたフェミニズムとは異なる視点を導入した第三波フェミニズムの流れと関係づけられるものであるだろう。たとえば、1996年にRE/Search Publicationsから刊行された『ZINES! Vol.1』と翌年の『ZINES! Vol.2』で紹介されているZINEには、女性の同性愛者による『Teen Fag』や肥満女性の視点を打ち出した『The Adventure of Big Girl』、移

民女性を扱った『Bamboo Girl』、派遣労働者の経験を綴った『Temp Slave』などがあり、様々なアクティビズムとZINEの間の結びつきを見出すことが可能である。

2000年代以降、インターネットが社会のインフラとして大きな力を持ちはじめの中で、紙のZINEの魅力が再発見されたところがある。たしかに紙の出版物における印刷代や在庫の管理の手間を考えると、自己発信におけるネットの恩恵は大きなものではあった。だが、ネットが普及するにつれ、そこでの大企業の影響力が大きくなったことや、無数の情報の中で文章が読み流され消費されてしまうことへの危惧が意識されるようになり、紙媒体の意義が再確認されるようになる。特に2010年代になると、SNSや動画文化が広がっていく中で、紙媒体における一瞬で拡散されないような“不自由さ”が新たな意味を持つようになった。たとえばネット上で反権威的な主張をすると、過剰にそれがバッシングされたり好奇の目に晒されたりすることが起きてしまいやすい。ネットはいろいろな人に自分のメッセージを伝える力を持つ場であると同時に、その場に自分の発言を置くことに対するリスクが存在する場でもある。インターネットの息苦しさが強く意識される時代だからこそ、自分の手で作ったものを、自分が納得のいくかたちで頒布し、自分が信頼できる人々とコミュニケーションを深めていくZINE文化の魅力は見えやすいかもしれない。

ただし、ネットとZINEを二項対立的に見る見方もまた誤解を招くものであるかもしれない。2010年に刊行されたTeal Triggs『Fanzines』という書籍の中では、インターネット上の個人サイトもE-ZINEとしてZINEに含めて扱われ、そこでは黎明期のウェブサイトが紹介されている。初期のネット文化には明らかにDIY的側面が存在していたし、そのような性格はいまもまだネットの中に存在しているはずだ。また、90年代にはコピー紙のZINEから始まって、フェミニスト・ポップカルチャー雑誌に育った「BUST」誌という例も存在しており、自主出版物と商業出版の境界線も

流動的なものであると言えるだろう。ZINEのあり方はさまざまなものでありえる。

5. 日本の自主出版文化の流れ

続き、日本におけるZINE文化について確認していこう。日本では、1960年代、マスコミが大きな力を持つようになる中で、それに対抗するようなかたちでミニコミ文化が生み出された。日本の出版流通のシステムは、戦時の検閲を前提とした制度を引き継ぐようなかたちで発展してきたため、現在に至るまで、大きな取次会社を経由するかたちで運営されている。この制度により全国に平等に書籍を流通させることが可能となり、日本の文化を豊かにしてきたのだが、中央集権的ヒエラルキー型のメディア構造が出来上がってしまっている。そうした事情もあり、安保闘争が盛り上がる社会状況下で、ミニコミは体制への異議申し立てを行うためのメディアとしてその意義を認識されるようになり、存在感を強めていった。政治運動と結びついた多くのミニコミが出版されていた。

70年代以降、政治の季節が終わり、消費社会が到来する中で、このミニコミ文化はだんだんと趣味的なものへと移行していく。70年代から80年代には大学におけるキャンパスミニコミなどのかたちでミニコミブームが到来することになる。また、同時期にコミックマーケットが1975年に始まり、マンガ同人誌の文化も大きなものとなっていく。趣味やライフスタイルを表現する媒体として自主出版物が流行するようになる。

90年代においては、マンガ同人誌ほど規模が大きなものではないが、個人発行のフリーペーパー文化が流行するようにもなってきた。だが、このフリーペーパー文化も、2000年代に入る頃になると、「ホットペッパー」などのクーポン・メディアが登場したり、地方自治体など経済的サポートの下で町おこしのために作成されるフリーペーパーが流行したりすることで、商業的な要素

との融合が生じはじめる。こうした状況の変化の中で、日本においても、改めて、自主制作物としてのZINEへの注目が集まるようになった。

この頃から、DTP（デスクトップパブリッシング）の発達と普及によって、個人でもプロと遜色のない出版物の制作が可能になり、これまでのジンの手作り感とは違う、規模は小さいが“プロっぽい”出版物や、“雑貨っぽい”作品なども登場しはじめている。このような状況を受け、新たに「リトルプレス」という概念も登場してきている。何をもって「商業的」、何をもって「自主的」とするかという基準自体も、社会のあり方や時代によって変わってくるものであり、自主出版のあり方も社会や時代の中でさまざまな姿をとるものであるだろう。

2010年代に入ると、自分の声を世に広げることの喜びをSNSなどで新たに知った人たちも増え始め、自分がつくったZINEを見せ合い交流する場も増えてきた。野中氏自身も、こういったコミュニケーションのきっかけとしての対面的なイベントを重視して活動してきたという。ただ、新型コロナウイルスの拡大が起きてしまった現在、今後のZINEを取り巻く状況の変化を見据えていく必要があることだろう。

6. 小さなメディアの社会的意味

このようにZINEとは社会の中でさまざまな形態を取りながらさまざまなメッセージを伝えてきた複雑な存在であり、その内実を単純に定義することはきわめてむずかしい。ただ、それでも、その中核に個人の経験を大事なものとして扱う視点が存在するという点において共通性を持つと考えることはできるだろう。そして、そのような個人の経験に根ざした性格は、近年、注目を集めているキンバリー・クレンショーによって提唱された「インターセクショナルリティ（交差性）」という視点と結びつくものでもある。

マイノリティ運動の権利要求による成果は多々あった。ただ、そうした中でもマイノリティ集団の中のマイノリティの存在が見過ごされてしまうこともあった。マイノリティのコミュニティ内部にも、さまざまな階層の違いや断裂は存在している。既存のアイデンティティ・ポリティクスの中ではそのような多層性はつい忘れられてしまう危うさがある。ZINEのような“小さな”メディアは、この多層性にこそ光を当て、その声を発信し、存在を示すことが可能である。そのような部分にZINEの社会的意義や政治的意義を見ることができる。そして、実際に自分でメディアをつくってみることによって、能動性を伴ったメディアリテラシーの獲得が可能になり、主権者意識を育む民主主義的な実践としてZINEを解釈することもできるだろう。

ただし、こうした政治的な意味づけとともに、役に立たなくてもやりたいからやる、くだらないものでもいいという性格もまたZINEにおいて大切な要素であるはずだ。世の中に不謹慎であるとされてしまうようなものやリスクを伴うような発言を擁護する空間としてもZINEは存在しているのであり、それは“読み捨てられてしまう”ような性格が保証してくれる側面でもある。

ZINEという“小さな”メディアの中には、単純にまとめることができないような複雑な豊かさが無数に織り込まれている。その豊かな可能性は、ZINEをつくりあげてきた多くの人たちの活動によって生み出されてきたものであるだろう。

以上のように、多様な性格と複雑な歴史を持つZINE文化の魅力が、野中氏の豊富な知識と具体的な実践活動に基づく感覚によって、説明されるイベントとして第85回ジェンダーセッションは開催された。さまざまなZINEの実物が画面に映されながら、質疑も展開されていった。今回のセッションは何よりも“楽しい”イベントとして展開され、そうした“楽しさ”の中で、学びと交流が重なり合う豊かな場が成立していたように感じられた。

